

城山山城出土新羅木簡の性格

日本古代の城柵経営との比較から

三上喜孝

Characteristics of Wooden Tablets Excavated from Seongsan Fortress :
A Comparison with the Management of Fortified Government Offices in Ancient Japan

MIKAMI Yoshitaka

はじめに

- ① 咸安・城山山城出土木簡の概要
- ② 城山山城木簡の製作技法の解明
- ③ 城山山城木簡の形態的特徴とその背景
- ④ 城山山城木簡と日本古代城柵出土木簡
- ⑤ 城山山城木簡と穀物運送
おわりに

【論文要旨】

本稿の目的は、韓国・咸安城山山城出土新羅木簡（以下、城山山城木簡と称す）の性格を、木簡の現状観察や、日本古代の城柵経営との比較を通じて、浮かび上がらせることにある。城山山城木簡は、考古学的な調査成果から、築城時に、城内の排水を円滑に行うための施設を造成するために、他の植物性有機物とともに集中的に廃棄されたことがわかり、つまり築城段階で廃棄されたことが明らかになった。木簡の大半は、各地から城内に運び込まれた食料に付けられた荷札木簡であり、築城にともなう労働の資養物として、慶尚北道を中心とする各地から運ばれた可能性が高い。

日本古代の東北城柵から出土する木簡の中には、城柵へ貢進された食料に付けられた荷札だけではなく、それを城柵内で再分配するための記録簡や、城内で管理するための物品管理用付札など、多様な木簡が出土している。この点は、荷札が大半を占める城山山城木簡とは異なっており、六世紀後半の新羅の山城で木簡が使用されるようになる、初期段階の様相を示しているものと思われる。

城山山城木簡が、築城時の労働力の資養物に付けられた荷札木簡であると想定した場合、古代日本の事例として参照されるのは、八世紀前半における、陸奥鎮所に対する地方豪族の私穀の運送である。『続日本紀』によれば、八世紀前半に、鎮兵の糧をまかなうために、板東諸国を中心とする郡領氏族に私穀を運送させ、その見返りに位階を与えるという政策を行っている。鎮兵制度の創設にあたり、陸奥国内だけで鎮兵の食糧を確保することが困難であったため、板東諸国の郡領氏族の私穀が期待されたものとみられる。城山山城木簡には、食糧の貢進者として外位を持つ人物もみえ、しかも慶尚北道各地から運ばれていることなどを考えると、食糧の貢進に各地の地方豪族がかかわっていたことは間違いなく、古代日本の初期の城柵経営と同様のあり方を想定することも可能なのではないだろうか。

【キーワード】 城山山城木簡、製作技法、城柵経営、穀物運送

はじめに

本稿の目的は、韓国・咸安城山山城出土新羅木簡⁽¹⁾（以下、城山山城木簡と称す）の性格を、木簡の現状観察や、日本古代の城柵経営との比較を通じて、浮かび上がらせることにある。周知のように城山山城木簡は、六世紀後半の新羅の山城から大量に出土した木簡群であり、しかもそのほとんどが、木簡の下端部に切り込み、あるいは穿孔が確認できることから、一連の木簡は同一の性格を持っていると考えられる。さらに木簡の記載様式として、地名、人名、そして「稗」や「麦」などの穀物名、「一石」という数量単位が多く確認できることもあわせると、これらは、日本の古代木簡にみられる荷札木簡と同一の性格のものとみて問題ないと考え⁽²⁾る。六世紀後半に作成された城山山城木簡は、七世紀以降に登場する日本の古代木簡のルーツを考える上で、きわめて貴重な資料群といえる。本稿では、城山山城木簡の性格を、各地から貢進された荷札木簡とくらえたうえで、その形態や記載内容に注目し、日本古代木簡との比較という観点から、ささやかな問題提起を試みたい。

①咸安・城山山城出土木簡の概要

咸安の城山山城は、加耶諸国の一国であった安羅国の故地に位置し、五六二年にこの地を掌握した新羅によって築かれた山城である。木簡は、山城の東門址付近の城壁の基盤施設として造成された排水施設から、他の植物性有機物とともに一括して出土した。木簡のほとんどは、端部に左右から切り込みを入れた、荷札の形状を有する木簡であり、城山山城木簡が、共通した特徴を持つ木簡群であることが確認された。

記載内容は、地名、人名、官位、物品名、数量などが記されており、

日本の古代木簡に照らし合わせて考えれば、典型的な荷札木簡の書式といえる。すなわち、城山山城木簡の多くは、各地からもたらされた物品に付けられた荷札木簡であると考えられる。しかも、物品名には「稗」が圧倒的に多くあらわれており、穀物の稗が運ばれてきたことを示している。

いくつか例をあげると、次の通りである。

○咸安・城山山城出土木簡⁽³⁾

「仇利伐 仇臨智一伐
尔利□支 <

二二八×三八×九 四号

「烏欣弥村ト兮稗一石<

一七七×一七×五 一一号

・「古臨新村智利知一尺那村」
・「豆兮利智稗一石 <

二〇九×一九×八 二九号

・「夷津支阿那古刀羅只豆支<
・「 稗 <

一八七×二二×一〇 三〇号

「上夢村居利支稗 <

一五八×二四×七 四四号

「及伐城只智稗一石」

一四五×二一×六 七四号

これらの木簡は、どのように使用され、廃棄されたのだろうか。調査担当者の李晨準氏が考察しているように、木簡は、低湿地や貯水池内部に自然に堆積されたものではなく、おそらくは山城築城時に、東側城壁の排水施設を造成するために、他の植物性有機物とともに意図的に堆積させたものと考えられる。⁽⁴⁾すなわち木簡は、本来の役割を終えたあと、城内の排水を円滑に行うための施設を造成するために、他の植物性有機物と同様の役割が期待され、集中的に廃棄されたのである。

その意味において、城山山城木簡は、木簡の機能を終えたあとに、排水施設の造成に必要な「植物性有機物」として二次利用され、二次利用された場で廃棄された、ということが出来る。すなわち、木簡の出土場所、あくまでも二次利用された場を示しているに過ぎず、木簡の本来の機能を果たした場とは、切り離して考えるべきである。

しかしながら、ほとんど同様の形状をもつ多数の木簡が、一時的、集中的に同一の場所に廃棄されている点はきわめて興味深い。ある段階で不要となった荷札木簡が、一括してこの地点にもたらされたことが推測できる。これは、荷札木簡そのものが、ほぼ同時期に一括して存在していたことをうかがわせる。

しかも、木簡が集中して出土する地点は、東側城壁の築造に先行して造成されたことも明らかにされており、出土木簡が、城壁の造営に先行して使用されていた可能性は高い。

以上のように、同種の木簡が短期間に集中的に廃棄されている点、また、廃棄された場が、城壁の築造以前にさかのぼって造成されたと考えられる点は、城山山城木簡の性格づけにも大きな影響を与えることになるだろう。この点については後述したい。

②城山山城木簡の製作技法の解明

次に、出土した木簡の製作技法について考察したい。早稲田大学朝鮮文化研究所ではこれまで、国立加耶文化財研究所と、城山山城木簡に関する共同研究を実施してきたが、その一環として二〇〇六年から二〇〇七年にかけて、城山山城木簡の釈文の作成や、木簡の詳細観察を行った。その成果は、日韓共同研究資料集の中にまとめられた。⁽⁵⁾筆者もこの共同調査に参加しており、以下、この共同調査の成果をふまえて述べることにする。

この共同調査での大きな成果のひとつは、木簡の製作技法の解明であった。木簡を詳細に表面観察すると、木簡の側面に樹皮が残っているものや、中心部に髄が確認できるものが多くみられた。

具体的には、調査により樹皮の付着が確認できたものが八点であり、樹皮はないが髄が確認されるものが七点存在した。とりわけ、両側面に樹皮が残っているものは、材の太さが正確にわかる資料であるといえる。

樹皮の残る木簡の幅をみていくと、個々にばらつきがあるものの、おおそ直径が二センチ〜四センチほどの、松の枝を利用して作られたことが推定できる。

次に、木簡の端部の成形について観察すると、枝から切断しようとする箇所に周囲から何度も刃を入れて、最終的に手で折っているものや、一面から水平に刃を入れたあとで手で折っているものなどが確認された。

さらに表面調整について観察すると、文字面を刃物であらかじめ調整しているものが多くみられた。なかには、全面に「カットグラス状」の調整が明瞭にみられるものもあった。また、その一方で、片面（多くは、

文字のない面)に、無調整のものや、荒く調整するにとどまるものなどもみられた。

穿孔については、文字面とは反対の面から文字面に向けて穿っていることや、孔を避けて文字が書かれていることが確認でき、あらかじめ穴を開けた上で、文字が記載されていることが確認できた。

さらに、端部における切り込み部分に、紐を巻いた痕跡が確認される一方で、切り込み部分にまで文字がわたっているものもみられる。文字の記載と紐の装着の前後関係を推定すると、まず文字が記載されたあと、紐を使って物品に括りつけたものと判断できる。

以上をまとめると、城山山城木簡の作成のプロセスは、以下のようになる。

- ① 直径二センチ〜四センチほどの松の枝を採取する。
- ② 枝の中心に刃を入れて縦に割る。
- ③ 外側の樹皮を剥ぎ、刃物で書写面を調整する。
- ④ 上下端を切断して適当な長さにする。
- ⑤ 端部に穿孔や切り込みをほどこして、木簡の形を完成させる。
- ⑥ 荷物に括りつける。

ところで、城山山城木簡をさらに詳細に観察すると、髄のある枝の中心に刃を入れて縦に割った上で、外側を丁寧に調整し、文字面を作りあげていることはすでに述べたが、実際の木簡には、わずかながら、調整面ではなく、無調整の面(すなわち、髄のある面)に文字を書いている例もみられる。このような状況が起こるのはいかなる理由からであろうか。ひとつの可能性として、木簡の加工者と、文字の記載者が、同一でなかったことが考えられる。木簡の加工者の意図を理解しないまま、文字が記載されたことを示しているのではないだろうか。

もしそう考えられるとすると、木簡があらかじめ、あるていど一括して加工されたあと、必要に応じて別の人物が文字を記載していったこと

になる。木簡の加工者と記載者が同一でないとすれば、六世紀後半の地域社会における、識字層の実態を考える上で、示唆的な事例となるだろう。

城山山城木簡の製作技法の観察を通じて知り得たことは、その多くが、松の枝を適当な長さに切り落とし、それを縦に半裁し、さらに表裏を調整することにより木簡を作成していた、という事実である。

また、松の枝が木簡の素材として盛んに使用されていたことは、城山山城木簡だけにとどまらず、他の韓国出土木簡にも顕著にみられる。たとえば、扶余の陵山里寺址から出土した、いわゆる「支葉児」木簡といわれる長大な四面木簡⁽⁶⁾は、明らかに枝を切り取り、樹皮を剥ぎ取り、外側を四面に調整したうえで、木簡として使用している。中国の觚を意識した形状の木簡ともいえるが、一方で、松の枝を利用して木簡を作成する、というこの当時の木簡作成の一般的な方法にのっとった作成法であると解することもできる。

製作技法の解明は、韓国出土木簡の特性や、当時の文書行政の実態を考える上で、きわめて重要な意味を持つものといえるだろう。

③ 城山山城木簡の形態的特徴とその背景

冒頭で述べたように、城山山城木簡は、(文字の書かれている方向からみて)材の下端部に切り込みあるいは穿孔を有している点が形態的に大きな特徴である。すでに指摘されているように、材の下端部に切り込みを持つタイプの木簡は、日本古代の荷札木簡にも確認されており、城山山城木簡の形態的特徴は、日本古代の荷札木簡に影響を与えたものと思われる。

ところが七世紀以降の日本の荷札木簡の多くは、実は材の上端部に切り込みが入っており、城山山城木簡の形態的特徴がそのままストレート

に影響を与えているわけではない。実際、韓国出土木簡の中にも、上部に切り込みが入った木簡も確認されている

○扶余・陵山里寺址出土木簡(三〇〇号、『韓国の古代木簡』所収番号。以下同)

・「 \angle 三月仲涼□上□」(再釈読による)

一六五×一六×五

○慶州・雁鴨池出土木簡(一八五号)⁽⁷⁾

・「 \angle 辛番洗宅□□瓮一品仲上」

・「 \angle □遣急使□高城醢缶」

一六五×四五×一一

雁鴨池木簡からは付札木簡が複数点出土しているが、いずれも上端部の左右から切り込みの入ったタイプであり、記載内容から、醢などを保管する容器に付けたものであることがわかる。⁽⁸⁾

城山山城における下端部の切り込みを持つ木簡は、出土点数が他とくらべて突出しているために、形態的特徴がきわだっているが、この特徴が韓国出土木簡全体に敷衍できるかどうかは、慎重な検討が必要である。

城山山城木簡はなぜ下端部に切り込みが入っているのか。それに対して、日本古代の荷札木簡の多くは、なぜ上端部に切り込みが入っているのか。この違いにはやはり何らかの意味があるのだろうか。簡単に結論が出せる問題ではないが、木簡の製作過程や使用方法を想定することで、仮説を立ててみたい。

城山山城出土の荷札木簡は、下端部の切り込みに紐を引っかけたり、あるいは孔に紐を通したりして、物品に装着していたと考えられるが、その場合、木簡の文字列は物品の天地とは逆方向に向いてしまうことになる。物品に付けられた状態で木簡の記載内容を把握するには、やや適

さない方法である。

一方、材の上端部に切り込みがある場合は、物品に装着した場合、物品の天地と同方向に文字が並ぶことになる。物品に付けられた状態で木簡の記載内容を確認する場合には、前者よりも適している。雁鴨池出土の付札木簡の上端部に切り込みが入っているのは、これらが物品管理のための付札という性格によるためだと思われる。

では、下端部に切り込みを入れることのメリットはどこにあるのだろうか。一つ考えられるのは、木札を物品に装着したあとに、文字を書く場合である。下端部が紐で固定されているので、書記者は、木簡を書きやすい角度に調節しつつ文字を書くことができるのである。これに対して、上端部が固定されている場合は書きやすい角度に調節することが難しく、装着した状態で文字を書くには向かないといえる。

すなわち、切り込みの位置の違いは、木簡が物品に固定された状態においての、文字の書きやすさを重視するのか、文字情報の読み取りやすさを重視するのか、という違いをあらわしていると考えられる。

とすれば、城山山城出土の荷札木簡は、木札に文字を記してから物品に装着されたのではなく、物品にあらかじめ無地の木札が装着され、その後文字が記された、という作成段階を想定することも、可能なのではないだろうか。

このように想定した場合、あらかじめ紐で括られた状態で文字を書くのであるから、文字は紐で括られている箇所よりも上に書かれなければならないことになる。だが、城山山城木簡を子細に観察すると、文字が材の下端部切り込みのさらに下まで記されている事例がみられる(三〇号木簡など)。この点から、前述の共同調査報告では、まず文字が記載されたあと、紐を使って物品に括りつけたと判断したのである。

しかしながら、これがすべての城山山城木簡について一般化できるかは、不明である。すでに述べたように、城山山城木簡の調整方法を子細

に観察すると、本来、文字が書かれるはずの面を平滑に調整し、文字はその平滑な面に書かれるべきはずであるのに、それとは逆の事例が何点か確認された。⁽⁹⁾ すなわち、平滑に調整された面に文字が記されず、無調整の面に文字が記されている事例がみられるのである。これは、木簡の製作時の情報を、書記者が十分に把握していなかったことを意味しており、荷札の製作と文字の記載との間に、時間的な差があったか、あるいは、荷札の製作者と文字の書記者が別の人物であった可能性を示している。日本古代の荷札木簡については、木簡の製作と文字の記載は同一人物が行ったとする見解があり、⁽¹⁰⁾ 木簡の製作者と書記者が同一であるか否かは、重要な論点である。

また、下端部に孔がある木簡の場合、文字が孔をよけて書かれている事例もみられ（二八号木簡）、少なくとも孔があげられた後に文字が書かれたことは確実である。これらの点から、木札が物品に装着されたあとに文字が書かれた可能性も、現段階では考えておきたい。

一方、あらかじめ文字を記したあとに物品に装着した場合のメリットは、同一の場所で複数の荷札に一括して文字を記すことができることであり、たとえば何か別の帳簿の情報を荷札に転記する場合には有効である。また、文字情報の読み取りやすさという点を重視すれば、荷札木簡の文字情報が、二次的に利用される際にも有効である。

日本古代の荷札木簡については、中央政府による貢進物の勘検の際に機能を果たしたとする「勘検機能説」が有力とされているが、近年では、貢進物の保管や利用の段階においても取り外されない荷札があることから、貢進物の内容・斗量・年月を示す役割を果たしていたのではないかとする見解（「貢納表示説」）⁽¹¹⁾ もある。

荷札に、保管時における内容表示の機能を想定した場合、上端部に切り込みにある木簡は合理的であるが、下端部に切り込みがある木簡は必ずしも合理的とはいえない。しかも城山山城の荷札木簡は、保管時や利

用時における「内容表示」の機能があまり重視されておらず、したがって、山城に納入された時点で物品から外され、廃棄されたのではないだろうか。荷札木簡の中に、物品名や数量が書かれていないものがあったり、物品名が木簡の裏面に書かれていたりすることも、この木簡が内容表示を意識した書き方をしていないことを推測させる。

むしろ、これは現段階での仮説に過ぎず、今後、さらに詳細な観察が必要であることはいうまでもない。文字がいつの段階で書かれたのかについても、現段階では、さまざまな可能性を想定しておく必要があるだろう。ただこの違いは、以下に述べることに合わせて、城山山城木簡全体の特徴を考える上で、大きな意味を持つと考えられる。

④ 城山山城木簡と日本古代城柵出土木簡

城山山城木簡の特徴として次にあげられるのは、城山山城出土の付札木簡にあらわれる地名が、現在の慶尚北道の地域に集中していることである。さらにこれらの地域と山城を結ぶルートとして、洛東江の存在⁽¹²⁾、そしてその運搬を請け負う在地首長の存在が注目されている。⁽¹³⁾ すなわち城山山城は、慶尚北道の諸地域から洛東江を通じて運ばれた物資により維持経営されていたことがわかるのである。

これは、日本古代の東北地方の城柵が、後背地域である関東地方や北陸地方などから運搬された物資により維持経営されていたことと類似しており、今後は日本の古代東北城柵との比較が可能ではないか、とかつて指摘したことがある。⁽¹⁴⁾

しかしながら、六世紀後半の城山山城と、八世紀以降の日本の古代東北城柵とは、その機能や活動時期に大きな違いがあり、両者は直接的に比較できるわけではない。実際、日本の古代東北城柵には、城山山城木簡のように、諸地域からの荷札木簡が大量に出土した事例はなく、むし

る荷札木簡以外にも、多彩な内容を持つ木簡が出土している点が特徴である。そこで本節ではまず、城柵への貢進物の納入とその運用という視点から、これまで東北城柵遺跡から出土している木簡を紹介し、城柵遺跡出土の木簡の特徴を考えてみたい。

日本の古代国家は、東北地方の居住民で国家に服属しない集団を「蝦夷」と呼び、七世紀後半以降、様々な方法で古代国家の支配下に置こうとつとめた。その方法の一つが、城柵による支配である。陸奥、出羽という最北の二つの国に、軍事拠点でありかつ行政の拠点としての城柵を建設し、そこに各地から徴発した鎮兵（陸奥国と出羽国の城柵で常時勤務する兵）や兵士（各地の軍団に配属し、定期的に城柵に勤務する兵）を配置して「蝦夷」と対峙したのである。

これまでの発掘調査によつて、とりわけ陸奥国の多賀城や、出羽国の秋田城、弘田柵といった拠点的な城柵から、整然とした建物配置が検出され、城柵経営の実態を知ることができる出土文字資料（木簡や漆紙文書）が数多く出土したことによつて、城柵が軍事的機能のみならず、行政的機能を持つ支配拠点であることが明らかになってきた。城柵は数多くの鎮兵や兵士のほか、実務行政に関わる人々も結集した場であった。そのため、日本の古代東北城柵は、早くから文書行政のシステムが整っていたと考えられる⁽¹⁵⁾。

では、日本の古代東北城柵から出土する荷札木簡についてみてみよう。まず、文献史料によれば、古代東北城柵に配置された鎮兵や兵士に対する粮米が、東国地方や北陸地方という後背地域から運ばれてきたことが確認できる。

○『日本紀略』延暦二十一年（八〇二）正月庚午条

越後国の米一万六百斛、佐渡国の塩一百廿斛を、毎年出羽国雄勝城に運送す。鎮兵の粮の為なり。

○『日本紀略』延暦二十二年（八〇三）二月癸巳条
越後国をして、米三十斛、塩三十斛を、造志波城所に送らしむ。

○『日本紀略』延暦二十三年（八〇四）正月乙未条

武蔵・上総・下総・常陸・上野・下野・陸奥等国、糒一万四千三百十五斛・米九千六百八十五斛を陸奥国小田郡の中山柵に運ぶ。蝦夷を征せんが為なり。

このように、東北の城柵で消費される粮米は、北陸地方の越後国（現在の新潟県）、武蔵・上総・下総・常陸・上野・下野などの板東諸国（現在の関東地方）から負担されたものであった。実際、このことを裏づけるように、陸奥国の多賀城跡から出土した木簡に、次のようなものがある。

○宮城県多賀城跡出土木簡（『宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅱ 多賀城跡木簡Ⅰ』）

・武蔵国播磨郡米五斗

部領使□□刑部古□□^(万呂カ)

・大同四年十^(三カ)月□□

二〇〇×三〇×一〇 〇三二

これは、大同四年（八〇九）に、武蔵国播磨郡から貢進された五斗俵に付けられていた荷札木簡である。オモテ面に記載されている「部領使」とは、古代において兵士・防人・衛士・鷹・米・贄・經典など人員や物資を引率して送り届ける使のことで、この場合も、武蔵国から多賀城までの、米を輸送する際の責任者として名前が記されたのであろう。

この木簡を城山山城木簡と比較すると、遠隔地から、軍事的拠点とし

ての城へ、穀物が貢進され、そこに荷札が付けられていた、という点で類似しているといえよう。

相違点として、多賀城跡木簡には貢進年月日が記されているのに対して、城山山城木簡には、貢進年月日を記したものはみられない。これは、多賀城では貢進者側あるいは受領者側で、貢進年月日の情報が必要であったのに対し、城山山城ではその必要がなかったことを意味する。多賀城跡木簡の場合、貢進年月日の情報は、貢進者あるいは受領者のもとで二次的に利用されることを想定していたと考えられ、この違いは、大きな意味を持つと考えられる。

ところで、日本古代の東北城柵から見つかる付札状の木簡の中には、諸地域から貢進された物品に装着されたとは考えられないものも存在する。日本古代東北城柵の一つである出羽国（現在の秋田県）払田柵からは、次のような木簡が出土している。

○秋田県払田柵跡出土木簡（『木簡研究』一九）

・「く白春米一斗六升」

・「く六月十八日」

一一二×一八×五 ○三二

オモテ面にみえる「白春米」は、白米を意味する。上端に左右から切り込みの入っていることから、一見して、荷札（貢進物付札）のようにもみえるが、貢進者の名前が書かれておらず、「一斗六升」の数量もそれにふさわしくない。ではこれは何を意味するのか。

時代が降るが、『日本三代実録』元慶五年（八八一）三月二十六日条によれば、出羽国の鎮兵の日粮として、一人あたり米一升六合、兵士の日粮として、一人あたり八合をそれぞれ充てることが定められている。この記事を参考にすると、「一斗六升」という半端な数量は、鎮兵でい

ば一〇人分、兵士でいえば二〇人分の食料支給額にあたり、つまりこの木簡は、鎮兵や兵士に支給すべき米に付けられたものである可能性が高い。⁽¹⁶⁾裏面の「六月十八日」は、支給日を意味するのかもしれない。

周知のように日本の木簡の分類では、物品に装着する木簡を付札木簡とよび、付札木簡はさらに、荷札（貢進物付札）と物品管理用の付札に分けられる。払田柵跡の付札木簡はまさにこの物品管理用の付札にあたりと考えられ、城柵内で作成され、一時的に装着されたものである。

城柵では、貢進された物品を集積するだけでなく、それらを鎮兵や兵士に日粮として分配する作業も行われており、その際にも、木簡が使用されていた。日本古代の東北城柵でしばしば、米の支給に関わる帳簿木簡が出土するのもそのためである。貢進、集積、分配といった一連のシステムのなかで、木簡による記録が行われているのである。

一方で、城山山城から出土した木簡のほとんどは、各地から「稗」や「麦」などの物品が運ばれた荷札（貢進物付札）の性格を持つものであり、その他の内容をもつ木簡はほとんどない。これが城山山城木簡の著しい特徴である。むろん、これまでの調査でも荷札以外の木簡が出土した事例もあり、今後も荷札以外の木簡の出土数が増加する可能性はあるものの、現段階では、この事実をどのようにとらえたいだろうか。

一つ考えられるのは、城山山城への物品の貢進、集積、そして分配に至る一連のシステムは、この段階ではまだ十分に成熟しておらず、そのことが、荷札木簡のみが突出して出土する事実と結びついているのではないか、ということである。また、前節で検討したように、木簡の製作者と書記者が別である可能性、物品に装着した後に記載が行われた可能性、そして内容表示を想定していない可能性などがあるとすれば、荷札木簡の作成方法や使用方法そのものも、成熟したシステムの中でとらえることができるかどうか、検討の余地がある。

もっともこうした評価は、六世紀後半という時期的な問題と、山城

であるという遺跡の性格の問題とも深く関わっている。先に述べたように、日本古代の城柵は、八世紀以降をその活動時期としており、日本で文書行政が十分に浸透した時期にあたる。そして軍事的機能のみならず、行政的機能も有していたと評価されていることから、城柵からバラエティに富んだ文字資料が出土するのは当然であった。これに対して城山山城は、六世紀後半という、新羅の地方社会においては木簡利用の初期段階の時期のものであり、しかも山城築城時にもたらされた木簡であると考えられる。加えて、木簡が同時期の一括資料である可能性が高く、物品の貢進が恒常的に行われていたかどうか不明である。いずれにせよ、城山山城木簡は、木簡による地方行政システムの試行錯誤の段階と評価できるのではないだろうか。

このことは、城山山城木簡の意義を決して低めるものではない。木簡という書写材料を選び取った新羅の社会が、どのような試行錯誤を経て、木簡を利用した合理的な行政システムを生み出すことができたのか。その過程については、これまでほとんど明らかにされてこなかった。城山山城木簡は、その空白の部分埋める資料として、今後もきわめて豊富な素材を提供してくれるものと思われる。

⑤ 城山山城木簡と穀物運送

これまでみてきたように、城山山城木簡は、その形状や記載内容から、各地から運ばれた荷札木簡であることは確実であるとしても、それは城内に駐屯する人びとの食料として、一定期間に恒常的に運ばれたものと考えられるよりもむしろ、山城の築城前あるいは築城時に、集中的にもたらされた物品に付されていた荷札と考えざるをえないのである。とすれば、たとえば、築城の労働力に必要な食料の貢納、という可能性を考えてみる必要があるのではないだろうか。すなわち、これまで見つかった

木簡のほとんどは、山城を築城するにあたり多数の労働力を動員する際に、集中的に投下された食料に付された荷札であったという可能性である。

このことを考えるうえで参考になると思われるのは、『続日本紀』にみえる、陸奥鎮所への私穀運送に関する記事である。『続日本紀』には八世紀前半の養老六年（七二二）から神亀元年（七二四）頃に、こうした記事が集中している。

まず養老六年（七二二）には、陸奥鎮所へ私穀の運送を奨励する太政官奏が出されている。

○『続日本紀』養老六年（七二二）閏四月乙丑条

（前略）又言さく、「兵を用いるの要は、衣食を本と為す。鎮に儲糧無くは、何ぞ固く守るに堪えん。民に募りて穀を出さしめ、鎮に運び輸すに、道の遠近を程りて差を為すべし。委せ輸すこと遠きは二千斛、次は三千斛、近きは四千斛を以て、外從五位下を授けん」と。奏するに可としたまふ。その六位已下、八位已上に至るまで、程の遠近に随いて穀を運ぶ多少、亦た各差有り。語は格の中に具なり。

これは、陸奥における鎮兵制度の創設にあたって、鎮兵の糧米を確保することが、当国（陸奥）の財政のみから捻出することが難しいため、私穀を導入することでまかなおうとしたねらいがあったものと思われる。⁽¹⁷⁾豪族は、私穀の運送の見返りに、「外授五位下」の位階を受けることを定めたのである。

この太政官奏を受けて、実際に私穀運送による授位が行われた事例が、やはり『続日本紀』にみられる。

○『続日本紀』養老七年（七二三）二月戊申条

常陸国那賀郡の大領外正七位上宇治部直荒山、私の穀三千斛を以て、陸奥国の鎮所に献ず。外従五位下を授く。

○『続日本紀』神亀元年（七二四）二月壬子条

（前略）従七位下大伴直南淵麻呂、従八位下錦部安麻呂、无位烏安麻呂、外正八位上壬生直国依、外正八位下日下部使主荒熊、外従七位上香取連五百嶋、外正八位下大生部直三穂麻呂、外従八位上史部虫麻呂、外従八位上大伴直宮足ら、私の穀を陸奥国の鎮所に献ず。並に外従五位下を授く。

前者では、常陸国那珂郡の大領が、陸奥鎮所に私穀三千斛を運送して、外従五位下を授かっている。後者は、国郡名は書かれていないが、位階やウジ名からすると、やはり板東諸国の郡領氏族とみられ、やはり私穀物を陸奥鎮所に運送した見返りに、外従五位下を授かっている。このように、おそらくは板東諸国の郡領氏族たちの私穀が、鎮兵の糧として運ばれたのである。

また、『続日本紀』には、次のような記事もある。

○神亀元年（七二四）四月癸卯条

坂東九国の軍三万人をして、騎射を教習し、軍陳を試練せしむ。綵帛二百疋、絁一千疋、綿六千屯、布一万端を陸奥の鎮所に運ぶ。

これは、陸奥に派遣する坂東九国の軍三万人に騎射を教習し、軍隊を試練させると同時に、綵帛二百疋、絁一千疋、綿六千屯、布一万端を陸奥鎮所に運ばせるというもので、坂東諸国から人と物を同時に負担させたのであろう。

こうして、鎮兵糧を確保するために、初期においては坂東諸国の私穀

が期待されていたことがうかがえるが、こうした状況は、出羽国においても同様であったと考えられる。秋田城跡から出土した木簡に、次のようなものがある。

○秋田城跡出土木簡（『秋田市史 第七巻 古代 史料編』）

「上野国進×

（七五）×三一×（三・五） 〇一九 二三号

・「上野国進南□×
（日下部カ）
□□□子□×

（九五）×（一七）×四 〇一一 二四号

「上野国進鎮×

（八〇）×（二一）×三・五 〇一九 二五号

「上野国緑□□□足□□

□□□米五石代

一一二〇×二一×一三 〇五一 七四号

これらの木簡は、「上野国進鎮×」などの記載から、上野国からの鎮兵ないし鎮兵用の物品を負担させたことを示す木簡と考えられ、鎮兵糧を拠出する財源をほとんど保持していなかった出羽国では、上野国など他国に鎮兵糧の負担をさせていたものと推測できる。⁽¹⁸⁾

陸奥鎮所の事例が示すように、八世紀前半の段階において、板東をはじめとする諸国から徴発された鎮兵を維持するために、坂東諸国からの穀物、とりわけ郡領氏族の私穀が期待されていたという事実は、城山山城出土の荷札木簡の性格を考えるうえでも、示唆的なのではないだろう

か。城山山城木簡には、新羅が在地首長たちに与えた外位一一位のうち、上干支（六位）、一伐（八位）、一尺（九位）などがみえており、外位を持つ首長たちによる、穀物運送が行われていたことは確実である。城山山城築城の労働力がどのように動員され、彼らを維持するための食料がどのようなシステムで運ばれたのかを、こうした視点からとらえなおすことも可能であるように思えるのである。⁽¹⁹⁾

おわりに

城山山城木簡は、城山山城の築城に先行するか、あるいはそれにともなつた時期のものであり、しかもそのほとんどは荷札木簡である。このことから、山城の築城にかかわる労働力への資養物としてもたらされた食料につけられた荷札木簡である可能性が考えられ、とすれば、山城の築城段階という、きわめて限定された時期のものであることになる。

今後は、築城後、山城で実際にどのような経営が行われていたかが課題となるが、ひとつ注目したいのは、論語木簡である。⁽²⁰⁾

韓国ではこれまでのところ二点の論語木簡が出土しているが、この二点はいずれも山城から出土しているのである。このことは、山城において、文字テキストのに対する需要が存在していたことを物語っている。日本の東北地方の古代城柵においても、『杜家立成雜書要略』の冒頭部分を記した木簡⁽²¹⁾（宮城県多賀城市市川橋遺跡出土）、『古文孝経』を書写した漆紙文書⁽²²⁾（岩手県奥州市胆沢城跡出土）、『文選』巻十九「洛神賦」の一節を記した木簡⁽²³⁾（秋田県秋田市秋田城跡出土）など、中国の典籍を書きつけた木簡や、書写した漆紙文書が出土しており、辺境の城柵は、中国の典籍や文字テキストと無縁ではなかったのである。

山城が築城された後、実際にそれが維持・経営されていくさいに、どのような行政システムが存在し、そこで、文書行政がどのくらい浸透

していたのだろうか。古代日本の場合、東北の城柵でかなりシステムティックな文書行政が行われ、それを下支えする郡司子弟たちが存在したことをかつて明らかにしたことがあるが、古代朝鮮の山城において、実態がどのようなものであったのかは、今後の課題である。

註

- (1) 城山山城出土木簡については、李京燮「咸安城山山城出土新羅木簡研究の流れと展望」『木簡と文字』一〇、二〇一三年が、近年の研究動向をまとめている。
- (2) 平川南「韓国・城山山城跡木簡」『古代地方木簡の研究』吉川弘文館、二〇〇三年、初出一九九九年。
- (3) 釈文は、早稲田大学朝鮮文化研究所・大韓民国国立加耶文化財研究所編『日韓共同研究資料集 咸安城山山城木簡』雄山閣、二〇〇九年による。
- (4) 李晨準「咸安城山山城木簡集中出土地の発掘調査成果」註3書所収。
- (5) 梁碩眞「咸安城山山城出土木簡の製作技法観察」、橋本繁「城山山城木簡の製作技法」、いずれも註3書所収。以下、製作技法に関する所見は、これらにもとづく。
- (6) 国立扶余博物館「百濟木簡」二〇〇八年。
- (7) 釈文は、註3書による。
- (8) 橋本繁「慶州雁鴨池木簡と新羅内廷」『韓国出土木簡の世界』雄山閣、二〇〇七年。
- (9) 橋本繁註3論文参照。二〇〇七年九月六日、七日に李成市、平川南、橋本繁、安部聡一郎、三上喜孝により、国立加耶文化財研究所において城山山城木簡の現物調査を行った。
- (10) 山中章「行政運営と木簡」『日本古代都城の研究』柏書房、一九九七年、初出一九九二年。
- (11) 吉川真司「税の貢進」『文字と古代日本3 流通と文字』吉川弘文館、二〇〇五年。
- (12) 尹善泰「韓国古代木簡の出土現況と展望」、李鎔賢「咸安城山山城出土木簡」いずれも『韓国の古代木簡』二〇〇四年所収。のち「韓国出土木簡の世界」雄山閣、二〇〇七年に再録。
- (13) 李成市「東アジア辺境軍事施設の経営と統治体制―城山山城木簡を中心に―」『古代文字史料の中心性と周縁性』春風社、二〇〇六年。
- (14) 三上喜孝「韓国出土木簡と日本古代木簡―比較研究の可能性をめぐる―」『朝鮮文化研究所編「韓国出土木簡の世界」』雄山閣、二〇〇七年。
- (15) 三上喜孝「城柵と文書行政」『日本古代の文字と地方社会』吉川弘文館、二〇一三年、初出二〇〇五年。

- (16) 三上喜孝「古代地方社会における公粮支給と帳簿」註15書所収、初出二〇〇一年。
- (17) 熊谷公男「黒川以北十郡の成立」『東北学院大学東北文化研究所紀要』二一、一九八九年、鈴木拓也「古代陸奥国の軍制」『古代東北の支配構造』吉川弘文館、一九九八年、初出一九九一年。
- (18) 鈴木拓也「古代出羽国の軍制」『古代東北の支配構造』吉川弘文館、一九九八年、初出一九九二年。
- (19) 橋本繁「城山山城木簡と六世紀新羅の地方支配」工藤元男・李成市編『東アジア古代出土文字資料の研究』雄山閣、二〇〇九年によれば、城山山城木簡は、その筆跡や記載様式の検討から、郡単位で製作されたものと推定されている。
- (20) 東野治之「近年出土の飛鳥京と韓国の木簡」『日本古代史料学』岩波書店、二〇〇五年、初出二〇〇三年。橋本繁「金海出土『論語』木簡と新羅社会」『朝鮮学報』一九三、二〇〇四年、同「金海出土『論語』木簡について」『朝鮮文化研究所編』韓国出土木簡の世界』雄山閣、二〇〇七年、同「古代朝鮮における『論語』受容再論」(同)。三上喜孝「論語木簡と古代地方社会」註15書所収。
- (21) 『木簡研究』二一、一九九九年。
- (22) 平川南『漆紙文書の研究』吉川弘文館、一九八九年。
- (23) 木簡学会編『日本古代木簡選』岩波書店、一九九〇年、『秋田市史 第七巻 古代 史料編』二〇〇一年。
- (24) 三上喜孝「城柵と文書行政」註15書所収。

(山形大学人文学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)
(二〇一四年一月七日受付、二〇一四年五月二六日審査終了)

Characteristics of Wooden Tablets Excavated from Seongsan Fortress : A Comparison with the Management of Fortified Government Offices in Ancient Japan

MIKAMI Yoshitaka

This article is aimed to reveal the characteristics of the Silla wooden tablets excavated from Seongsan Fortress in Haman, Korea (hereinafter “Seongsan Fortress wooden tablets”), through an examination of their current state and a comparison with the management of fortified government offices in ancient Japan. Archaeological research has discovered that Seongsan Fortress wooden tablets were collectively disposed of along with other vegetable organic materials to build efficient drainage facilities when the fortress was established. Most of the wooden tablets discarded during the construction were shipping labels of food delivered to the fortress from various parts of the country. It is highly likely that the food was provided for construction workers from North Gyeongsang Province and other places in the country.

Wooden tablets unearthed from the sites of ancient fortified government offices in Tohoku, Japan, include not only shipping labels of supplied food but other various kinds of tablets such as record tablets for redistribution of food and inventory tags for management of goods within the government offices. This point provides a contrast to Seongsan Fortress wooden tablets, which mainly consist of shipping labels. They seem to be excavations from the initial stages of wooden tablet culture before it spread to Silla fortresses in the late sixth century.

Assuming that Seongsan Fortress wooden tablets were shipping labels of food supplied to workers constructing the fortress, this article analyzes the delivery of private grain to the Mutsu Pacification Headquarters from influential clans in the first half of the eighth century as a comparable case in ancient Japan. According to *Shoku Nihongi* (*Continuation of the Chronicles of Japan*), the early eighth century saw a policy to make district magistrates in Bando provide their private grain to pacification soldiers in exchange for rank. It seems that when establishing the pacification soldier system, the government counted on food aid from the district magistrates in Bando because Mutsu could not secure food supply for the soldiers on its own. Seongsan Fortress wooden tablets indicate the involvement of local officials in food supply as well as the geographical spread of such suppliers in North Gyeongsang Province; therefore, there is no doubt that powerful local clans in various places engaged in the food supply, which might have been similar to the initial situation of fortified government office management in ancient Japan.

Key words: Seongsan Fortress wooden tablets, Production technique, Fortified government office management, Grain delivery
